Japanese association of educational psychology

PC 01

「グラフィック感情開示質問紙」による感情開示の発達的研究
－小学生から大学生までの横断的研究－

○仁平 義明　　川原 亜紀子＃
（東北大学　文学部）

表情など、非言語的チャネルによる自己開示の研究では適切なツールの開発が必要である。そこで、描画された表情を付した感情開示質問紙（グラフィック感情開示質問紙）を作成し、小学生から大学生まで横断的研究をおこなった。さらに、その影響要因についても検討をおこなった。

方　法

1　＜使用質問紙＞

(1)「グラフィック感情開示質問紙」（仁平、1999）

6種の表情を、3種の対象に見せるのに、どの程度抵抗感があるか7段階評定。表情は、喜び、悲しみ、怒り、恐怖、驚き、不快（図1）。対象は、父親、母親、同性の親友。

(2)「関係の親密さ尺度」

仁平と大平（1993）による関係質問紙の「親密さ」尺度10項目。信頼性はα=.92～.94）。

(3)「性役割ステレオタイプ」

伊藤（1978）によるM-H-Fスケール。

2　＜調査対象者＞

小学5・6年生140人、中学1・2・3年生208人、高校1・2・3年生209人、大学生（大学院生を含む）134人。合計、685人。

結果と考察

1　＜表情開示抵抗の因子分析＞　表情の開示抵抗感評定からは、2因子が抽出された。第1因子は「不快な印象を与える表情」、第2因子は「オープンな印象を与える表情」であった。前者は、「いやそうな顔」「怒っている顔」の因子負荷量が大きかった。後者は、とくに「うれしそうな顔」「驚いている顔」の負荷量が大きかった。

2　＜表情開示の抵抗要因＞　重回帰分析の結果、(1)「不快な印象を与える表情」の開示抵抗感では、「対象との親密感」のみが有意な寄与要因だった。「年齢が低い」ことは、有意に近い寄与要因だった。(2)「オープンな印象を与える表情」の開示抵抗感に対する有意な寄与要因だったのは、「対象との親密感の低さ」、「男」、「年齢の低さ」。「性役割ステレオタイプ」は、有意に近い寄与要因だった。

3　＜表情開示の発達的特徴＞　個別の表情では、「いやそうな顔」の開示抵抗感が中学生女子友人間で特に高い傾向がみられる（図2）。逆に「うれしそうな顔」の開示抵抗がこの関係で低い。この結果は、青年期初期の女子の友人関係にとって表情の開示が親密さを演出するものでもあることを示唆する。

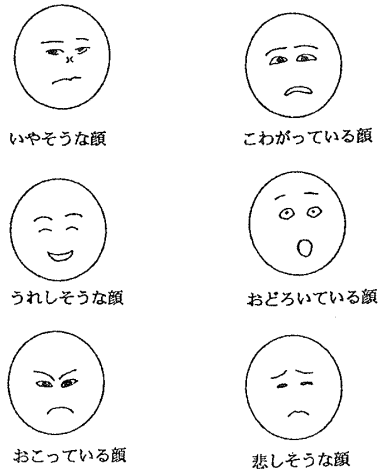

図1　使用された6種類の表情の図

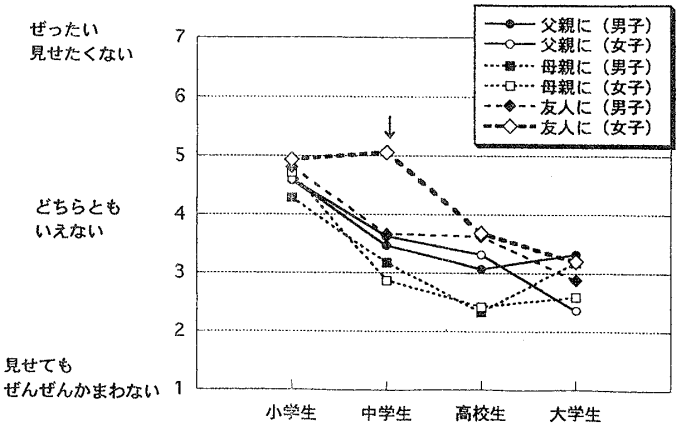

図2　「いやそうな顔」の開示抵抗の発達変化

NII-Electronic Library Service